

1 小学校の表記は楷書世界

滋賀大学教授 中村史朗

新連載「楷書を考える」は、楷書という書体の理解を基盤にしながら、書写導入期の課題や、小中接続期の課題についても取り上げていきます。

第一回は、楷書とはどんな書体なのか、指導する際の留意点とともにご紹介します。

1 現代の公用書体

小学校での表記を考えると、児童の目に触れるものは全て楷書で書くということが前提になっています。学習指導要領で「正しく」「整えて」というのは、楷書によって、という意味です。当たり前のようですが、手書きや活字で多様な書体、書風が用いられる実社会のありようとは随分と異なった環境といえます。

教師の側から見れば、指導上のノウハウは経験とともに蓄積されていきますが、そもそも楷書という書体がどのような書法上の原則に拠っているのか、あるいはそれが現在の日本語の表記にどのように

2 楷書ってどんな書体？

漢字は、一般に五つの書体（五体）に分類してその生成の過程が説明されます。公的な場面で使用されてきた篆書、隸書、楷書と、実用的な要求に応じた行書と草書です。今日では、さまざまな新資料が発見され、書体変遷の過渡期の状況が明らかに becoming ことで、五つの分類は実態に

そぐわないものになります。しかしながら、教育の現場においては、漢字が三千年以上にわたって姿を変えながら命脈を保ってきたことを説明するうえで今なお有効な分類法といえます。五体の分類に拠れば、楷書は最後に完成した書体で、以後新しい書体は生まれていません。およそ六〜七世紀に中国で完成した典型的な楷書をモデルにしながら、今日にいたるまで楷書は公の場の中心で用いられてきました。現在でも明朝体、教科書体、パソコンのフォント類も基本的にすべて楷書です。小学校においても、公用書体としての楷書を理解し、あらゆる生活場面で活用できるよう楷書による表記を初歩から学びます。

1960年京都府生まれ。専門は書学書道史。漢字を中心とする書家としても活躍。光村図書 中学校「書写」および高等学校「書」教科書編集委員。



3 書き方の原則

では楷書の書法の原則とはどのようなものなのでしょう。

楷書は、一つの点画を書くときに「三節」で運筆します。始筆→送筆→終筆という例の取り組みですね（※1）。これも今日では書くときの常識のように考えられがちですが、楷書がその姿を定める中で固まってきたものです。楷書には、三節で書くことによって点画が分節する、という特色があります。毛筆書写の導入時にパーツとして「基本点画」を学ぶことができるのも、漢字の画数がカウントできるのもこの用筆原理に従っているからです。

次に、楷書は、独立した点画が組み合わさって一字を構成します。この点画構成は、実は微妙な点画構成を基本としていて、歴史的な名筆の姿を正確に書き写そうとすると相当に書法を学ばないといけません。しかし小学校書写では、高度な書法の前提となる大きな原則を徹底することが大切です。楷書に限らず各書体の書法は毛筆を使用する中で作り上げられてきました。楷書の場合、三節の運筆リズムに拠って、点画の均衡関係を保ち

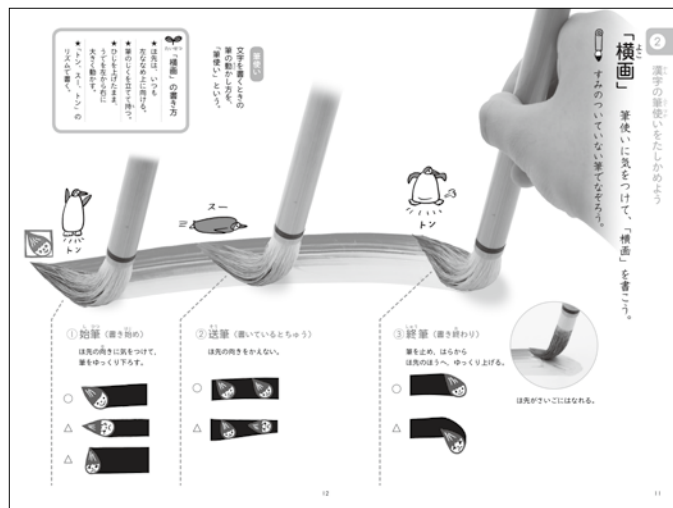
4 楷書事始め

— 将来の表記を見据えて —

ながら一字を組み立てようとする、やはり筆鋒（ひつぽう）の動きや筆圧の強弱が、文字の姿の完成に深く関係しています。しかもいうまでもなくそれは漢字という場において展開されてきたものです。

いでしょうか。空書きで三節を意識させたり、水書板を使って毛筆の動作を見せたりすることも有効でしょう。

初めに教科書体活字や書写体ありきの指導ではなく、先に述べた、楷書の書体を育んだ歴史的な営みにまで視点が届くような指導側の構えが重要であろうと筆者は考えています。本連載では、書写の指導をこれまでと少し違った角度から考えていきます。



▲※1 『書写』3年 p11-12